

國學院大學學術情報リポジトリ

「神道」はどう翻訳されているか：
神道と日本文化の国学的研究発信の拠点形成：
21世紀COEプログラム

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 國學院大學21世紀COEプログラム 公開日: 2024-06-22 キーワード (Ja): 170.4, 神道 シントウ キーワード (En): 作成者: 井上, 順孝, ウエイマイヤー, アン, マクナリー, マーク, ベンテリー, ジョン・R, マセ, フランソワ, 魯, 成煥, ハーディカ, ヘレン, プロール, インケン, ベルトン, ジャン=ピエール, 櫻井, 治男, ロコバント, エルンスト, 國學院大學21世紀COEプログラム メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/0002000502

【司会】 それでは最初のパネリストはインケン・プロールさんで、ドイツの方でございます。現在ベルリン自由大学の講師をされております。日本には2回、合計4年ほどいらして、色々フィールドをされた、とお聞きしています。一回目は慶応大学で、二回目は東大の研究生として色々リサーチをされて、その後ドイツで教鞭をとられている訳です。そうしたドイツのフィールドワーカーから日本の神道研究に対して、翻訳ということを手懸りに、いくつか問題提起をしていただければと思っています。それでは、よろしくお願いします。

発題

インケン・プロール

「イデオロギー的言説と行為・実践思考的宗教との狭間で、所謂神道に関する概念、カテゴリーの翻訳を巡る諸問題」、これが今日の私の発表のタイトルになります。西洋諸言語において、神道なるものを記述しようとする場合、翻訳の次元で数多くの問題が生じてまいります。それらの諸問題は、例えばドイツという視点で、つまり独自の宗教的概念、宗教的实践を有する異質の文化、という視点から神道なるものに向き合わざるを得ない、という事実のみに起因することではありません。そればかりではなく、かなりの程度、神道という概念の下に含まれる諸現象とどのように向き合うべきかに関する激しい論争に関連しているのです。神道に特有の諸概念を適切に翻訳しようとした場合、神道なるものをめぐって展開している議論を考慮せざるを得ず、さらには、こうした議論を翻訳という作業に反映させるべく努める必要があります。

こうした理由から、以下の2つの点を考慮して議論したいと思います。第一の点は、個々の宗教自身によって使用されている概念が、翻訳先の文化へコンテクストライズされるという作業が、翻訳するという1つの過程であるということです。第二の点は、宗教を記述する際には、採用される分析カテゴリー自体に批判的な反省の眼が向けられなければならないという点です。

ドイツにおける宗教の用語法も、またそれを記述するメタ言語も、基本的にはキリスト教、とりわけプロテスタンティズムの諸概念による刻印を受けています。従って、こうした概念やカテゴリーを使用する際には、それらを可能ならしめている全体要件を批判的に吟味することが必要となってきます。しかしながら、ドイツにおいては従来の宗教学事典や他の専門的な辞典類のみならず、比較的新しい辞典類の多くでも、上に述べましたような批判的な視点が欠如しているように思われます。たとえば、Kröner社から1985年に出版されました *Wörterbuch der Religionen* (『宗教辞典』) に拠りますと、*Shintoismus*—

英語の Shintoism が、日本の原宗教、民族宗教として特徴付けられています。2003 年に出版された最新の宗教学ハンドブックには、トーマス・インモース (Thomas Immoos) の手になると「Shintoismus」という項目があり、そこでは神道は、引用しますと、「日本民族土着の宗教的概念および儀礼であり、その中心は自然崇拝と先祖崇拝にある」と規定されています。

さらには、インモースがそこで挙げているキーワードとしてはアルカイックな基礎、原宗教、民族神道といったものがあります。これらの概念は、神道なるものを記述する際に、頻繁に使用されるアニミズムやシャーマニズムの術語と同様、回避されるべき概念です。と申しますのも、これらの概念は曖昧であるか、あるいは、ヨーロッパにおけるオリエンタリズムの言説に由来する立場を表しているかの何れかであるからです。つまり、記述のためのカテゴリーとしては使用に耐えられない訳です。相変わらず Sintoismus つまり、英語の Sintoism に相当する術語が使用されているという事実は驚くべきことです。

長きにわたる神道の歴史において、神道は実際に統一的、一体として現れてきたのか？という問いを巡る論争が存続している事実を考慮すれば、体系的な距離あるいは世界観を含有している「ismus」、「～ism」という接尾詞が使用されているというのは驚愕に値する事となります。例えば仏教学者のベルナル・フォール (Bernard Faure) は英語の Buddhism の代わりに複数形の Buddhisms という術語を使用することを提案しています。

一般的に神道という概念に多種多様の諸現象が包摂されている、理解されていることから、フォールの提案に倣ってドイツ語でも複数形の Sintos つまり、諸神道という表現を使用することがふさわしいかもしれません。またインモースに見られるような原神道あるいは民族神道といった概念も、統一的・一体的な教理・行為体系を備えた宗教という仮定に落ち着いてゆえに、その使用は避けられるべきです。ピーター・フィッシャーは、ドイツ語の辞典類および専門文献に於ける神道に関する記述は多くの場合、誤解を招きやすいような記述になっているということの原理を詳細に分析しています。ここでは、フィッシャーによる分析があるという指摘をするに留めます。

さて、国家神道についても触れたかったのですが、時間の関係で 1 つの点だけを強調しておきたいと思います。それは、国家神道は時折 Staats-Religion (国家宗教) と訳されているのですが、Staats-Religion、に代えて、Staate-Kult (国家祭祀あるいは国家儀礼) という術語を使用することが適切であると思われます。場合によっては Zivilreligion—英語の civil religion—つまり市民宗教という表現を、国家神道の特徴付ける概念措置として使用することが適切であるかもしれません。

日本の宗教学者がいわゆる新宗教、あるいは新新宗教を研究する際、対象としては天理教、大本、天照皇大神宮教 (踊る宗教)、神霊教といった神道系の新宗教団体を取り扱っています。こうした宗教団体に於いては、神、生き神、救い、助ける、言霊といった言葉が重要な役割を果たしています。概念的に困難をもたらしていると思われるドイツ語の術語は、lebender Gott あるいは leibhaftiger Gott といった表現です。これは日本語の生き神の翻訳として当てているのですが、前者は生きている神、後者は顕現した神、あるいは肉

体を持った神といった意味を持っています。

その際問わなければならないのは、いわゆる生き神として表現される諸現象の多くにおいて、ある神がある人間を通して語るといった場合に、人間の身体が一時的に占有されてしまうという現象が意味されているのではないかという点です。仮にそうであれば、ドイツ語では *Medium Gottes*、つまり神の媒体、として訳すことが適切でありましょう。仮にそうでなければ、生き神という表現で理解されている事態は、宗教の創唱者において実現している、神々と人間との一致という状態を表現することであることになります。その場合には、*Vergöttlichter Mensch*、つまり神として崇拝される人間という訳で充分でありましょう。さらには、生き神という表現によって教祖や宗教的な職能者の神との特殊な関係や、彼らの特殊な権威が意味される場合があります。この概念の翻訳の幅が、今簡単に述べましたような考案であるということから、生き神という概念が使用されているコンテキストを絶えず検証する必要があるとともに、機械的にドイツ語の *lebender Gott*、つまり生きている神という言葉に訳するということは避けられなければならないわけです。

神道における宗教行為を記述する際に祈る、祈り、団体参拝という表現が使用されています。ドイツ語では祈りという言葉は一般に *Gebet* つまり英語の *Prayer* に相当する言葉で訳されています。祝詞という概念にも時折この *Gebet* という言葉が当てられています。*Handbuch religionswissenschaftlicher Grundbegriffe* (『宗教学基本概念辞典』)、これはドイツで出版されている一番大切な、基本的な辞典です。その辞典によれば *Gebet* というのはドイツの *Gebet*、*Prayer* というのは相互交渉の儀礼であります。引用しますと、「そこでは宗教的事項の理解、宗教的意思、あるいは期待などが言語化された、または黙祷などのように思惟行為という形態をとり、個人あるいは複数の人間がどのような性格を有するものであり、何らかの対象、換言すれば「なれ」と呼びかける対象との間に、関係性を作り上げる、あるいは、作り上げようと試みる」。以上引用ですが、このような行為であると定義されています。従いましてこうしたドイツ語の *Gebet* の宗教学的定義が、祈りや祝詞という現象に常に相当するかどうか吟味される必要があります。

祈りや祝詞という際には多くの場合、その実践を通して、外部から観察可能となるような諸規定を忠実に遵守することが必要であり、神々の注意を喚起することが目指されています。ですから、彼岸の対話相手との関係性の確立が意図的に目指され、また、こうした関係性が打ち立てられているかどうか、という問いが提出されなければなりません。したがって祝詞を *rituelle Anrufung zur Götter* と祈りを *Bitten an die Götter* とドイツ語で表現することが、多くの場合適切であろうと思われます。日本語では前者は神々への儀礼的嘆願、後者は神々への請願といった程度の意味になります。

さらに、助ける、救い、救済といった概念もきわめて多くの問題を抱えている概念であることがわかります。

ドイツ語の文献では、これらの諸概念について詳細を無視して、*Erlösungsvorstellungen*、つまり新宗教の救済観念として十把一からげにしている場合も散見されます。ドイツ語にはこの *Erlösung* という言葉のほかにも *Heil* という言葉もありますが、この *Heil* という言

葉の概念は、例えば神々が支援してくれること、神々が希望をかなえてくれたり、災厄から守ってくれること等の、きわめて一般的な意味での「平穩無事」を表する言葉です。またこの概念は此岸への至福の樂園状態をさす場合も、また死後の幸福な状態を表する場合もあります。それに対して先ほどの *Erlösung* という概念は、一義的には、死後に永遠の生命が至福状態に入るという意味での、いわゆる救済を指しています。

ヨハネス・ラウベ (Johannes Laube) の研究によれば、天理教が目指しているのは、「世界一れつ」を助けることであるとされています。ラウベの訳では *Der Menschheit helfen* となっています。それは人類を助けるという意味になります。時折、救済するとか習合するという表現も見受けられますが、基本的には助けるという言葉が使用されています。他の新宗教のいわゆる救済観念を見てみれば、此岸における利益や、此岸において実現されるべき至福状態が、多くの場合中心的な役割を果たしていることが理解されます。ですから、こうした諸概念は彼岸志向の *Erlösung* という概念によって常に適切に記述されるのかどうかを吟味する必要があります。新宗教の此岸志向ということを考えると、*Erlösung* ではなく、*Heilvorstellen*、すなわち「救いに関する諸観念」と表現したほうが適切である場合は少なくないでしょう。Heil という概念を選択することによって、神道系の新宗教において、現世利益とか功德の追求が有する特別の意味を適切に捉えることが可能になるかもしれません。

中立的、客観的ではない翻訳のもう 1 つ別の例を挙げるなら、それは言霊という言葉の翻訳です。言霊はしばしば *Wortmagie* つまり言葉の魔術と訳されています。Magie という概念はキリスト教の伝統に由来しています。すなわち Magie という表現によって意味されているのは、キリスト教の護教論者の目から見て異端あるいは異教とみなされた諸宗教でありました。つまり Magie とは常に他者の宗教であったわけです。ですから、この概念は宗教論争といった文脈で、その意味を獲得してきたものです。Magie という概念のように神学的な闘争概念ですから、言葉に由来する力というものの特殊な様態を表現するものとしては不適切です。ですから、私個人としては、言霊の翻訳として例えば、*religiös wirksame Kraft der Worte* という表現を使ってはどうかと考えています。それは言葉が有する宗教的効力といった程度の意味になります。

最後にもう 1 つの例を挙げますならば、それは新宗教の翻訳として使用されている *Neue Religionen* という概念です。それは新しい宗教という意味を持っています。ドイツでは日本の新宗教は *Neureligionen*、あるいはときおり *Sekte*—英語の *sect*—として取り扱われています。これらの概念は西洋の社会において新たな宗教団体が成立する際に、キリスト教と競合関係に入らざるを得なかった、という歴史的事実がニュアンスとして含まれています。

ここ 200 年の間に日本において新たに生まれてきた宗教団体は、既成宗教および当該社会の関係において、西洋社会におけるいわゆる新宗教運動やセクトとは基本的に異なっています。ですから、この基本的な相違を明示するために、新たな記述および分析的なカテゴリーを導入しなければならないかどうか、という問いが検証されなければなりません。

それは個人的な意見ですが、Neue religionen に代わる術語としては Moderne Religiöse Organisation という表現が有効ではなかろうかと思われます。それは、近代の宗教的諸組織といった意味を持つ表現です。

発表を終わるにあたり諸宗教を記述する際に重要な2つの概念について話したいと思います。それは霊性と信仰—英語の faith の意味—という2つです。まず、霊性という概念についてお話しします。霊性、精神的、スピリチュアルといった概念は、現在の日本において好んで使用されています。特に宗教を評論家的に語る学者の間で流行語となっています。例えば中沢新一は、日本人の特殊なスピリチュアリティに関して語っていますが、彼によればそれは原神道の中に見出すことができるということです。中沢新一のようないわゆる霊性的知識人の手による文献では、スピリチュアリティという表現が極めて曖昧な観念として使用されているということが理解されます。また、この概念はしばしば宗教に対する対抗概念として使用されています。こうした用語を使用することで、こうした人々は彼らがいうところの隠された真理とか、はかりにくい秘密の連関といったものを指し示し、それを復興させようとしているのです。けれどもこうした隠された真理とか、はかりにくい秘密の連関といったものは、おそらくは人間と神の関係についてのキリスト教神秘主義の残滓なのでしょう。日本の諸宗教や神道に関するドイツ語の文献では、religiös (宗教的)、okkult (隠された、つまり神秘的、超自然的、オカルト的) という言葉、そして magisch (魔術的)、spirituell (霊的) といった用語が一部ではかなり恣意的に使われています。私としては、たいていの場合には、religiös という表現がもっとも明確であるという見解にくみするものです。

では、最後に、神道を信仰、すなわち Glaube として特徴づけられるかということについて話したいと思います。こうした信仰という言葉の言語使用は極めて問題であると思われる。と申しますのも、神道なるものが一体どの程度、通例信仰と日本語に訳されている Glaube なるカテゴリーによつて的確に特徴づけられるかという点が明確にされなければならぬのです。繰り返して強調されているように、神道は明確に形式化されているような教義も、いわゆる啓示された経典も有しておりませんから、Glaube の対象、つまり信仰内容が不明確です。

例えば中牧弘允やイアン・リーダー (Ian Reader) もそうであると思いますが、こうした人たちの見解によれば、日本の宗教—もちろんこの中に神道も含まれていますが—の中心には宗教的行為、実践が位置しています。過去の長い歴史において、また現在の日本においても、この実践されている宗教的行為を特徴付けているものは、多くの場合、過去から継承されてきた特定の信念、つまり Glaube 信仰といったものでも特定の宗教制度の特徴的な結びではありません。日本における宗教的实践は目的志向的であり、習慣的であり、この場限りの性格を持っています。このように、日本の諸宗教には行為・実践志向が顕著に見られますから、Glaube、信仰という概念によって、上に特徴づけられた日本における宗教的实践が適切に捉えうるのかどうかという点を検討する必要があるわけです。宗教なるものは、何らかの形で Glaube、信仰と関連しているはずであるという広く流布して

いる見解は、キリスト教、特にプロテスタンティズムが Religion、宗教という概念成立に及ぼした影響に起因していると見ることができます。神社、およびいわゆる新宗教教団にみられる神道的実践行為を観察してみれば、宗教的なものは Glaube なくしても、その影響力を行使していることが理解されます。そして、その結果は人々においても社会全体においても、明確に認められます。

こうした点が、神道が自己言及する際に用いる概念や、神道を記述する際に用いられている記述的概念の翻訳という作業においても明確に意識されるならば、それは諸宗教団体に関する認識、さらには、宗教という概念に関する認識もかなりの程度深めるものとなるでありましょう。以上でございます。ご静聴ありがとうございました。(拍手)



質疑応答

【司会】プロールさんどうも有難うございました。今まで神道、あるいは日本の宗教についての言葉を翻訳するときに、やはりキリスト教的な概念でそれに近いものを当てるといって、そういうやり方が主流であった。しかし、これからはもっと現実に即してといいますか、神道なら神道で実際に行われていること、それをぴったりと表すような言葉を探していく、そういうことが必要ではないかという主張として私は受け止めました。

それから、私はプロールさんがこういう考えを持っているとは知らなかったのですが、新宗教を *moderne religiöse Organisation* (近代の宗教的諸組織) というふうに呼んだ方が良いのではないかということです。私も最近、新宗教は近代宗教(modern religion)と呼んだ方が良いのではないかということを書いていたりしていますので、仲間が増えたよううれしさがあります。それはさておき、確認のための質問をお願いしたいと思います。大きな問題はコメンテーターのコメントの後の総合討論でやる予定になっています。従いまして趣旨を確認しておきたいとか、あるいはこういう場合はどうかとか、細かな質問をいただければと思います。どなたでも結構ですので挙手をしていただければと思います。所属とお名前をお願いします。

【田島忠篤】天使大学の田島といいます、はじめの方に「ミンゾク宗教」という言葉が使われたと思うのですが、日本語の。その場合はエスニックという意味なのか、フォルクという意味で使われたのか、どちらの方なのかちょっと解らなかったので、私、エスニックという意味で使われたのではないかと思うのですが、ちょっと確認の為にお願いします。

【プロール】それはインモースの引用なんですが、ドイツ語の *Volks* 神道でした。だから批判しました。

【田島忠篤】わかりました、どうも私勘違いしてたんで、どうも有り難うございました。

【玉川千里】先生のお話でドイツ語の *Heil* という言葉を広くお奨めのように伺いまして、そうなのかなあと思いましたけど、細かいことですが、*Heil* という言葉は英語に当てればどういう言葉が一番近いでしょうか？

【プロール】それは *salvation* になるかなと思っています。

【平野孝国】新潟大学名誉教授の平野と申します。たくさん問題があると思いますが、この中で例えば救済ということばですね。これは、*Erlösung* ですが、*Erlösung* というのは神の怒りから *erlösen* (解放する) なんです。ところが、日本では神の怒りというものはないんですから、そうすると日本では、そういう意味での *Erlösung* というものは日本にはないんです。日本には救済という言葉の代わりに救いという言葉はありますけれども、救いという言葉は水を掬うという表現がありますように、何でも救うわけですね。つまり自分の力で、ある困難な状態から脱却できない状態である人に対して力を貸して、それを平常な状態に戻すこと。これがまあ、日本語でいうところの救いということです。翻訳です

からしかたないことですけれども、基本的には救済という言葉は日本語では存在しない。これに対して救済という言葉はキリスト教の言葉であってですね、それを *Erlösung* と言っている。それは結構ですけれども日本には救いという言葉はないんだと、こんなふうに考えますがいかがでしょうか？

【プロール】私が言いたいことをもっとはっきりと表現していただいてありがとうございました。そうした救済観念は、最近ではワールドメイトのなかで使われています。もしかしたら、最近の展開の過程のなかで使われているということかもしれません。もう1つは日本人の宗教学者に使われています。

私が言いたいことは、それは実は日本にはもともとなかった観念ですから、*Heil* のほうがいいということです。*Heil* はもっと一般的な表現ですから。悪い状態がなくなる、その程度のことの実践を表現したいわけです。

【中野裕三】國學院大學非常勤講師の中野と申します。前に國學院大學日本文化研究所にヘルベルト・ザッヘルト (*Herbert Zachert*) 先生という方がいらっしやいまして、その人が神道の神というのはルドルフ・オットーのいうヌミノーゼ的なものなんだということを神道の神話という辞典のなかで述べておられます。先ほどの問題は *Glaube* という言葉ですけれども、やはり神社の中でも信仰対象というか、神様に対しての儀礼、神様に対しての信仰というのがやっぱりあると思います。私はそのザッヘルト先生のヌミノーゼ的な存在なんだという考えに非常に賛成なんです。その意味で言えば私は神道の場合も *glauben* っていう言葉を使ったほうが適切なのではないかという、ご発言とは正反対の趣旨です。そのあたりをいかがお考えなんでしょうか？

【プロール】ヌミノーゼは宗教学的な立場から見ると非常に難しい概念であると思っています。それは、宗教の自己言及的な言葉ではなくて、宗教学者が育てたものです。それは一体なんでしょうか、定義はあまりわからない。ですから、それを使わないほうがいいと思っています。

【中野】私が言いたいのは、ヌミノーゼの問題はともかくとして、神社信仰にも神々という崇拜対象があるわけです、それに対しての *glauben* っていう言葉を使うのが適切なんではないでしょうか？

【プロール】それは信仰の定義によって違ってくると思っています。私の考えでは、信仰ということは、決められた内容がはっきりしていることです。それはずーっと信仰されているものなのです。もちろんお寺とか神社にいたり、祈りをしたりそのときは神様が存在するという考えが強くあるでしょう。でもそれはずーっと持続的に続いているのどうか、ちょっとそれについて検討が必要であると思っています。

でも、面白いのは、日本の宗教的な思考的な実践を見ると、実は、例えばキリスト教の中では、いつも信仰ということは実践のレベルではもちろんなかったかもしれません。ですからそれは、宗教は機械的な信仰である、それはそうではない可能性がある。それは面白い結論であると思っています。

【ヤン・スィングドー】オリエンズ研究所のヤン・スィングドーです。さっき平野先生が

仰ったことに戻りたいと思いますが、私は皇學館大學で毎年キリスト教概論を教えているので、やはり救済という言葉は、学生たちはなかなかわかってくれないんです。でも救いというと、なんとなく通じるみたいです。そこで、別に結論ではありませんけど、神道はどう翻訳されているかの前に、日本人が日本語で何を言っているのかという問題があるんじゃないんですかね。

【司会】そうなると宗教学者もかなり責任が問われるということになりまして、結局救うというのがどちらかと言えば一般用語であるのに対し、救済という言葉は主に宗教研究者、あるいは宗教家も使う、クリスチャンは使うと思いますね。それを神道系の新宗教の場合にも、例えば生命主義的救済観という言葉を使った人がいるわけです。私ではないんですけど、私の研究仲間にいます。そうしますと、神道系の新宗教に対しても救済という概念を当てはめたのも、研究者ということになるかもしれません。

それでも、救うという言葉に *Erlösung* をあてるのは相応しくない、とお考えかどうか、その点を言っていただければいいと思います。つまり、「救済」という表現は、確かに一般に馴染んだ神道を理解するための言葉ではない。でも「救い」という表現はある。神仏の救いというようなことはいえる。その場合の「救い」という言葉は *Erlösung* では不適切かどうかです。

【プロール】よくないと思います。

【司会】その理由をもう一回確認させてください。

【プロール】*Erlösung* というのは死後の特別な状態の、パラダイスのような状態になるんですから。ただ、宗教には死後の状態を追求するだけではなくて、宗教には毎日毎日の救い、だから此岸の救いというところが強いです、それは日本の宗教を見るとよくわかるようになると思っています。

【司会】わかりました、ここから後は大きな問題になるわけです。つまり、神道に死後の救いとか、そういうことが考えられてないかどうか？ というようなテーマに入っていくと思います。これは総合討論で話題になりましたら扱うということにしまして、時間も一応来ましたので、Inken Prohl さんの御発題はここまでといことにしたいと思います。どうもありがとうございました。